

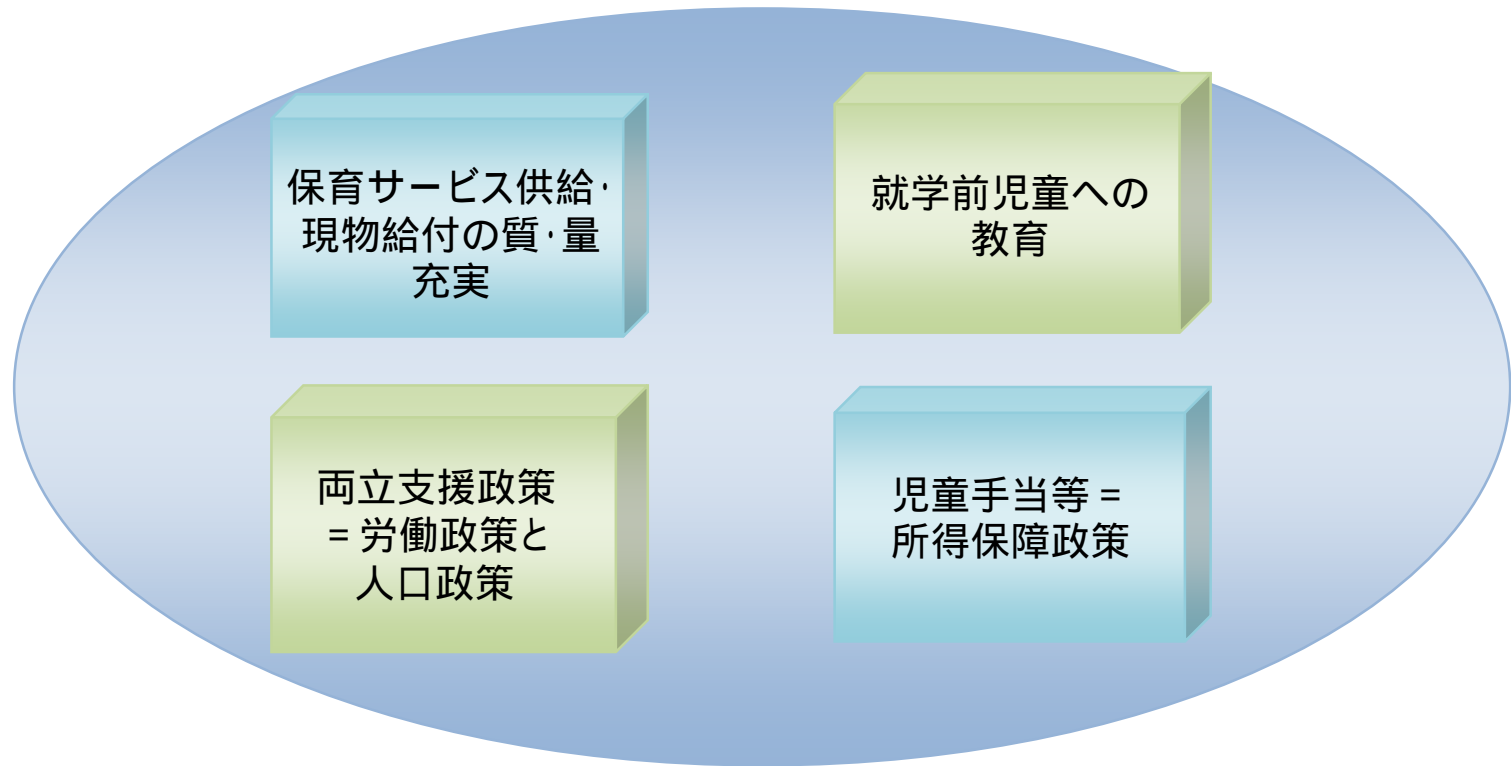
次世代支援の重要性 - 貧困の世代間連鎖と そのメカニズム -

駒村 康平

慶應義塾大学経済学部教授

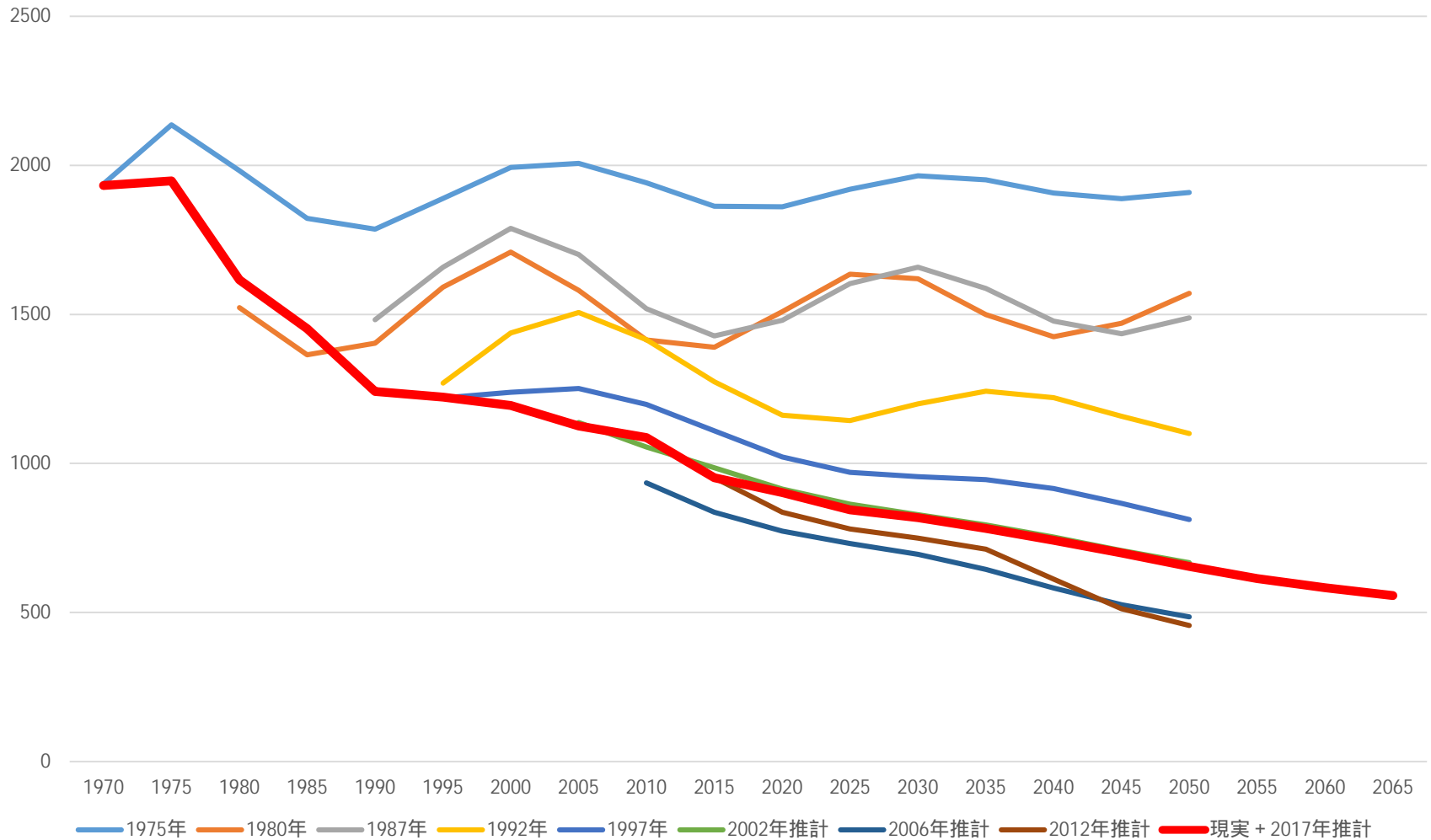
ファイナンシャル・ジェロントロジー
研究センターセンター長

子ども・子育て支援政策の4つの分野 = 政策手段と政策目標の対応



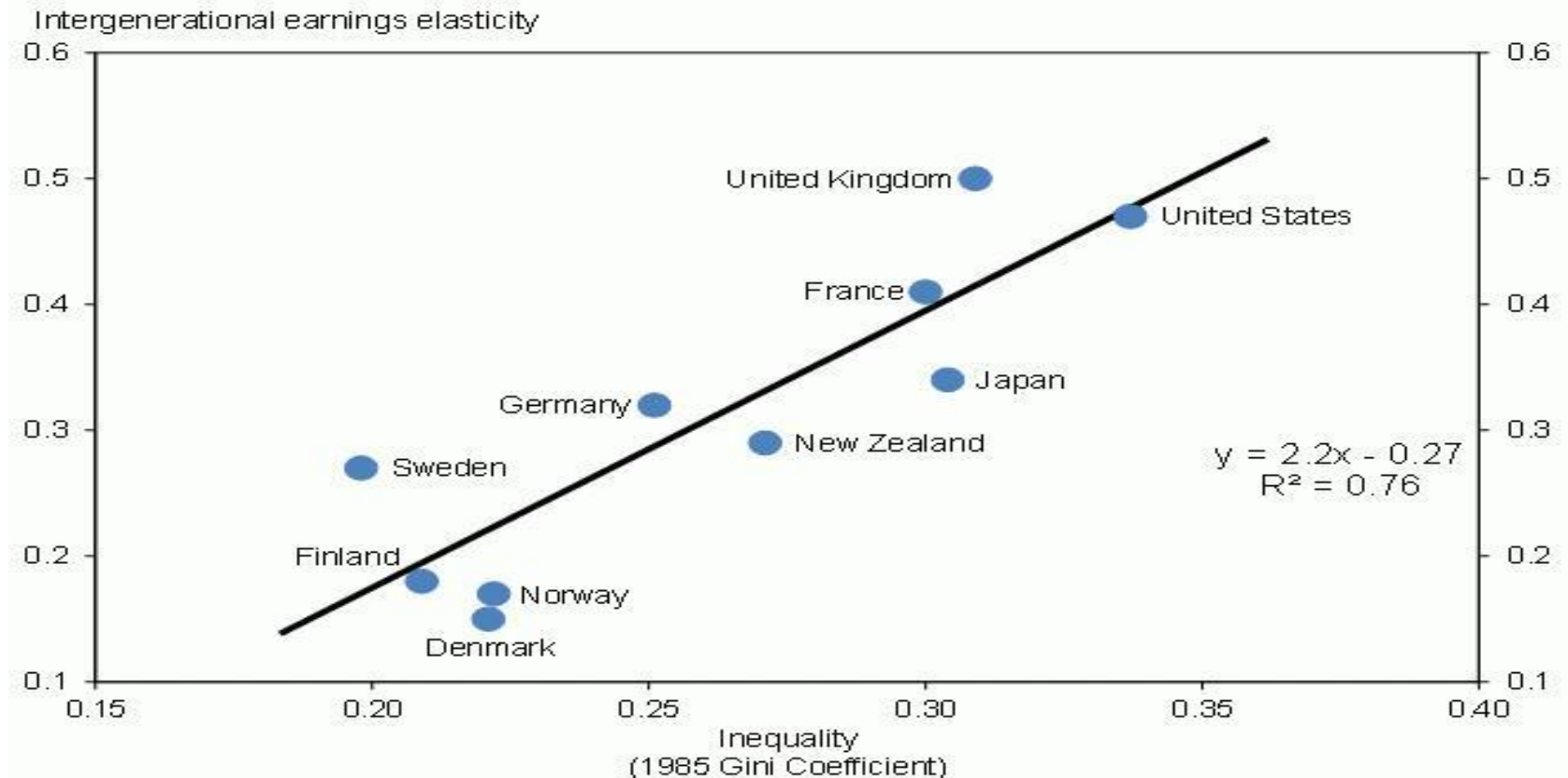
「出生数は80年で4分の1へ」出生数（単位：百万人）

出生数の現実と予測（1000人）



国立社会保障・人口問題研究所『将来日本の人口推計』各年より作成

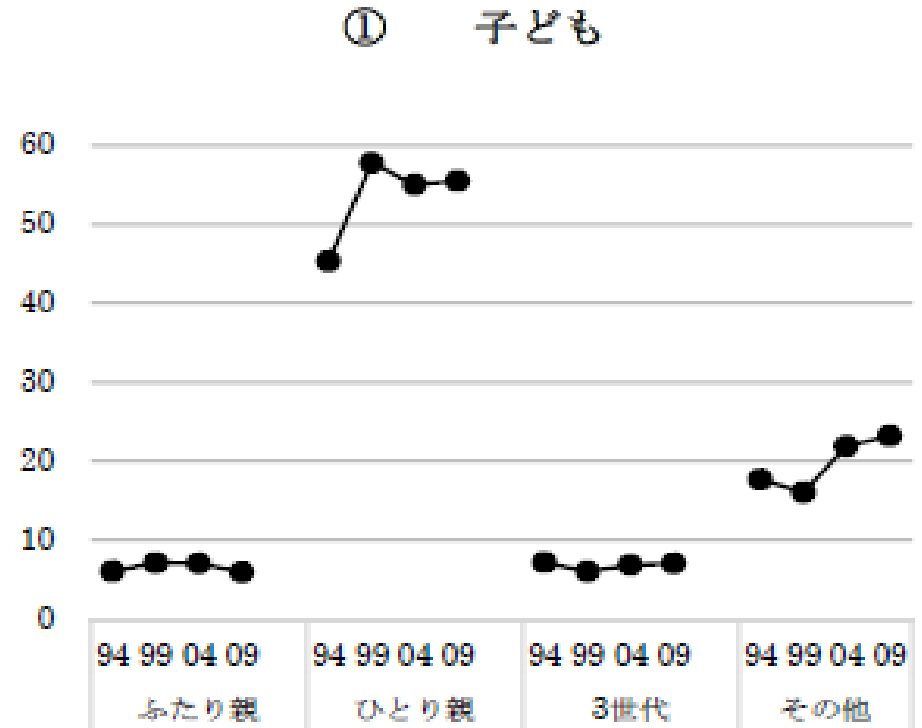
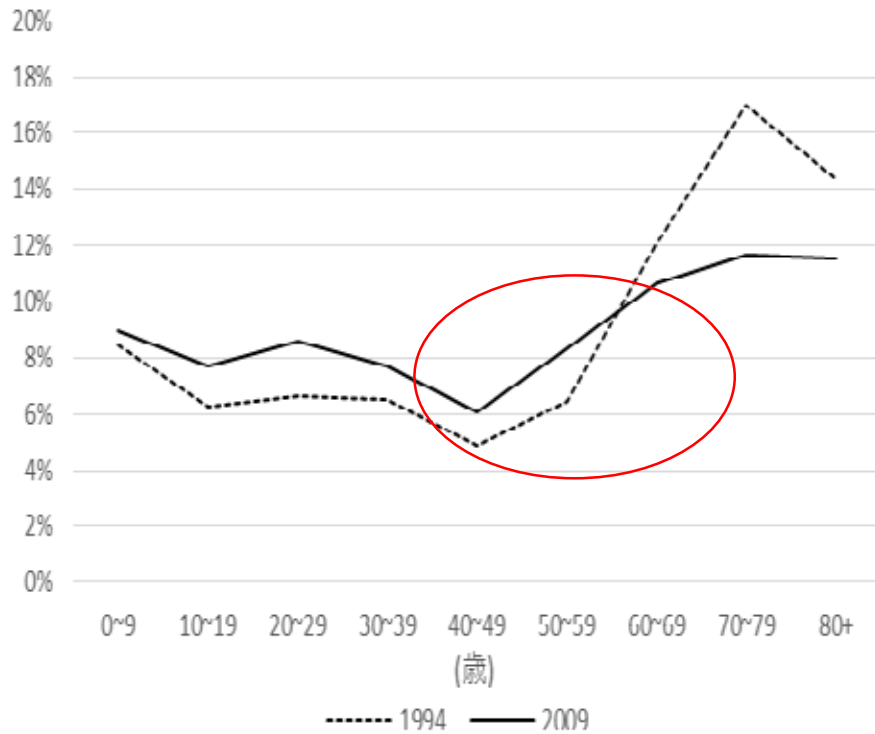
世代間の貧困格差の連鎖



Corak (2013) – “Inequality from Generation to Generation: The United States in Comparison,” in Robert Rycroft (editor), *The Economics of Inequality, Poverty, and Discrimination in the 21st Century*

本人の年齢別貧困率の推移

- 広がる子ども・現役世代の貧困と縮小する退職世代の貧困 -



駒村・渡辺・田中・四方 (2017) 「日本の所得格差と貧困 - 『全国消費実態調査』 (1994-2009) を用いた検証」

現状把握：「都道府県別」の子どもの貧困率の推計 (国民生活基礎調査の推計とは数字は異なる)

- 駒村康平・渡辺久里子・田中聡一郎・四方理人(2017)日本の所得格差と貧困 - 『全国消費実態調査』(1994-2009)
- データ：『全国消費実態調査』の個票データ(1994 - 2009)

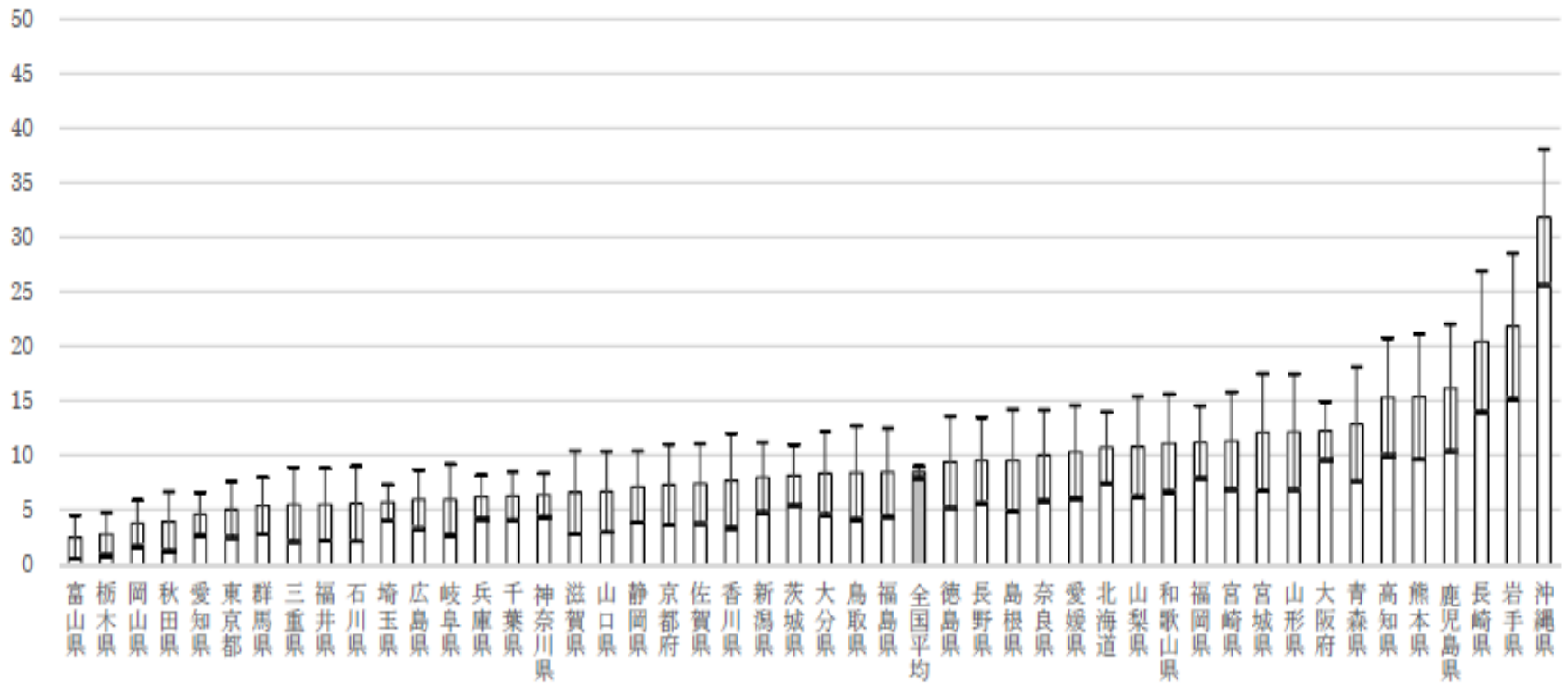
約5万世帯のサンプルサイズの確保により各県の子どもの貧困率が推計可能

先行研究では、『就業構造基礎調査』の世帯収入を利用しているが、本研究では独自にマイクロシミュレーションにより推計した所得税(住民税)・社会保険料を差し引いた可処分所得で貧困率を計測。

- 相対的貧困率：等価可処分所得の中位値の50%

相対貧困率（95%信頼区間）

図11 都道府県別の相対的貧困率（等価可処分所得、子ども、2009年）



(出所)駒村ほか(2017)より作成

アメリカにおける貧困経験の影響

	子ども時代（15歳未満）の累積貧困年数（％）		20歳時点の貧困率	25歳時点の貧困率	30歳時点の貧困率	35歳時点の貧困率
合計	0%	（0年）	4.1	5.3	4.3	0.6
	1-100%	（最低1年以上）	20.8	20.1	13.6	13.3
	1-50%	（1-7年）	12.4	13.6	7.3	8.1
	51-100%	（8-14年）	46.0	40.0	33.6	45.3
白人	0%	（0年）	4.0	5.1	4.2	0.4
	1-100%	（最低1年以上）	15.2	13.9	7.9	7.3
	1-50%	（1-7年）	10.7	10.4	4.7	4.2
	51-100%	（8-14年）	40.0	31.7	25.0	**
アフリカ系アメリカ人	0%	（0年）	4.7	8.1	6.9	5.2
	1-100%	（最低1年以上）	34.6	38.9	29.6	27.1
	1-50%	（1-7年）	19.4	29.8	19.0	20.0
	51-100%	（8-14年）	51.3	48.4	41.8	43.4

ニュージーランド、ダニーデン市、1000人の長期追跡調査

1 母親の就労の有無：3、5歳時点での子どもの体験、活動頻度、読書、テレビ視聴量、就学前施設の利用、言語発達、運動発達、知能、問題行動に有意な差がない。

2 社会経済レベル：高い家庭群ほど子どもの体験数が多く、読書量が多い。

3 親の歯の健康状態：子どもの歯の健康状態は密接に関係する。

4 学歴初期における子どもの精神障害の原因

母親の精神的な衛生状態、両親の別居歴といった家庭環境の悪さと相関関係が強い。

5 母親の21歳未満に出産、3歳までの分離経験、母親の知能指数、母親の神経性的傾向、家族の多さ、家庭環境

→11歳の非行リスク、注意欠陥障害、5歳児の言語理解、表現・運動能力、IQ、13歳時点の認知能力にマイナスの影響

6 7, 9歳で家庭のなかでいざこざ：11歳時点での精神障害に罹患する危険性が高い。

7 非行：触法行為の経験率が最も高いのは青年期。17歳をピークで後に急激に低下する。20歳前半に半分、28歳で85%が触法行為をやめる。

- ・非行には青年限定型と長期継続型がある。

- ・一部に触法行為が継続するグループがある。どのライフステージでも男性の5%が深刻な反社会行動を起こす可能性がある。

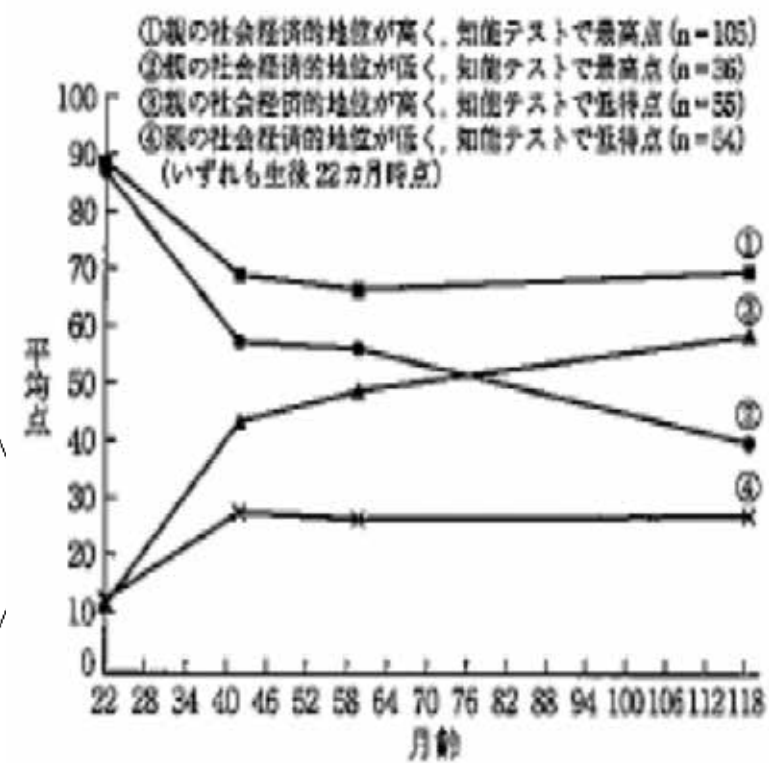
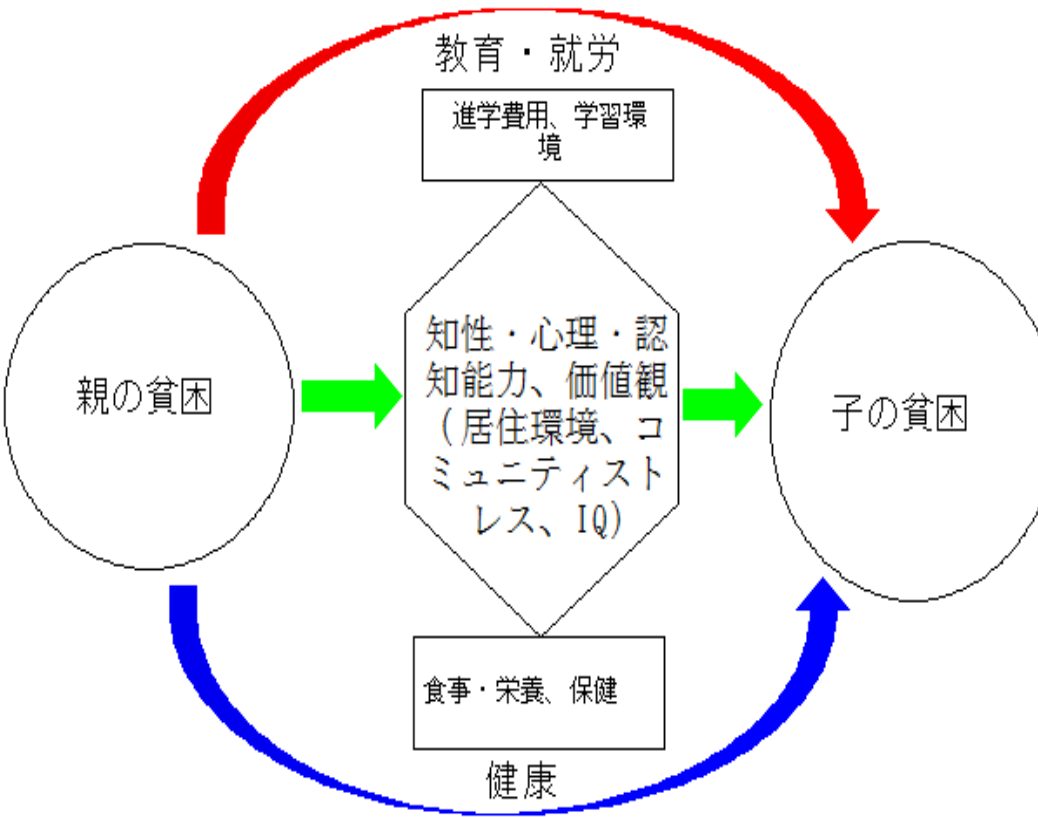
8 7 - 11歳までの間に最初の補導歴：成人後の犯罪の有無を推計できる。

9 長期継続群の男子は他の男子と比較すると、1) 家庭環境がわるい、2) 親への愛着が不安定、家庭内の葛藤が多い、多動、注意欠陥、不安定、精神病質、自尊心が低く、学校になじめない、という傾向がある。

10 乳児における神経システムの可能性：母親のアルコール、薬物依存、出産時の合併症、栄養状態の悪化、児童虐待、乳児期における情緒的刺激の欠乏

11 家庭環境で子どもの犯罪歴を左右する要素はネグレクトである。

貧困の世代間連鎖（所得（教育、栄養）ルートと環境ルート）

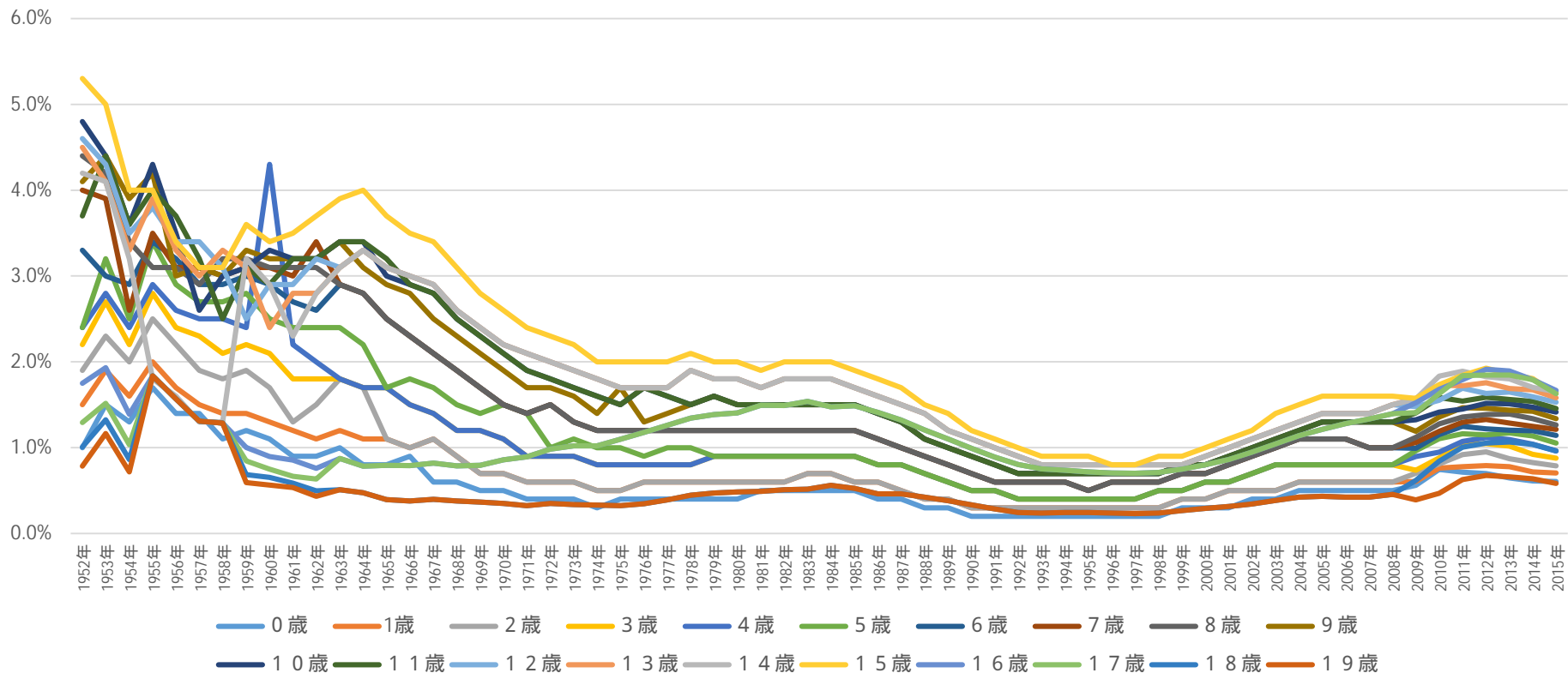


出典：Fairstein (2003).

図9 ファインステイン・グラフ

出典：ヘレン・ピアソン『ライフ・プロジェクト』（大田直子訳）みすず書房

子どもの生活保護率の動向

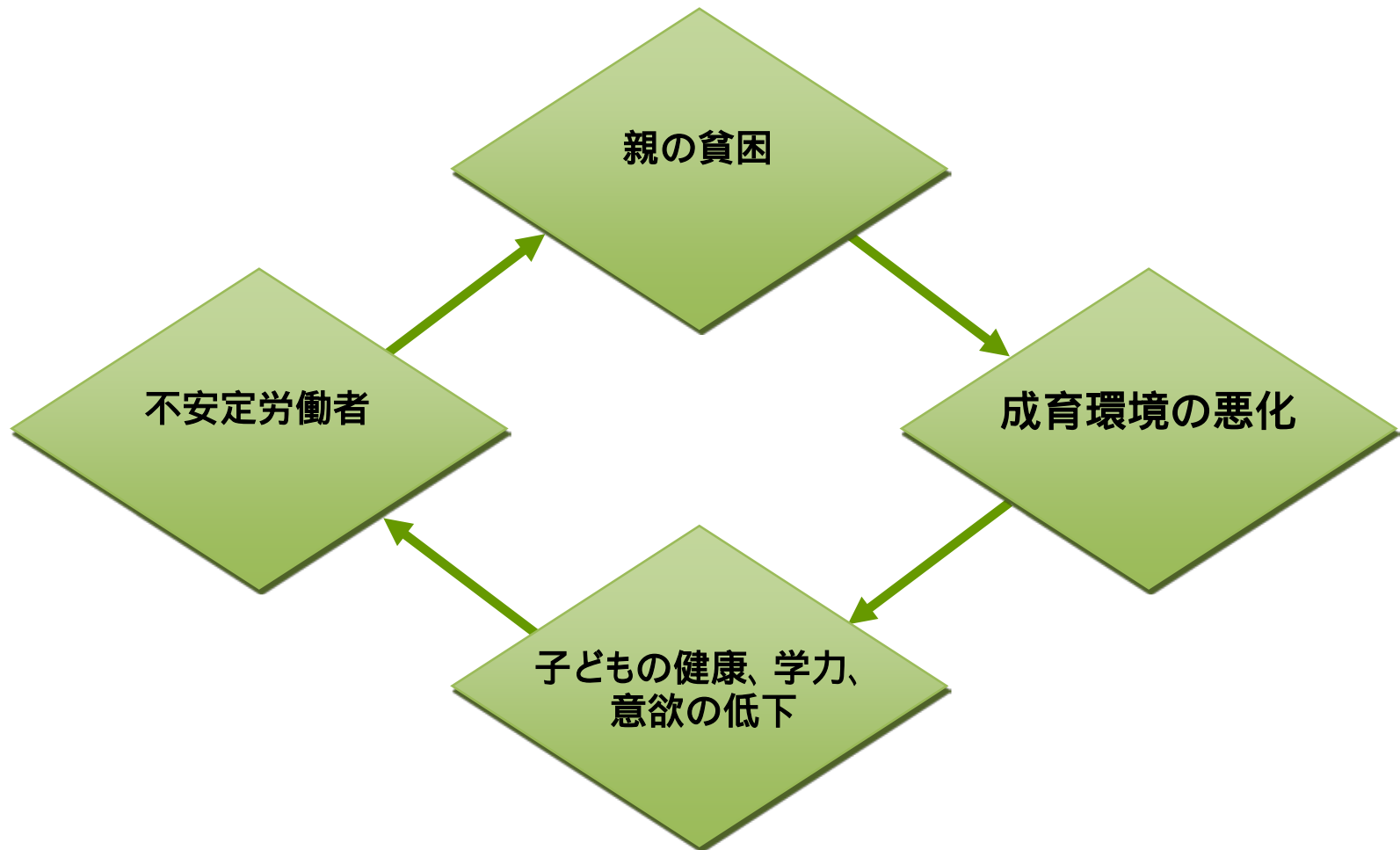


日本における生活保護受給の世代間連鎖に関する先行研究

論文名	利用データ	受給世帯の世代間連鎖の有無、程度
青木（2003）	北海道B市の被保護母子世帯の聞き取り調査（19ケース）	3/19件（15.8%）件が生活保護受給歴あり。経済的困窮経験は15/19件（79%）。
中園（2006）	北海道釧路市被保護母子世帯アンケート（181ケース）	14.6%（結婚するまでの期間）
福岡県立大学附属研究所（2008）	福岡県田川地区の生活保護廃止台帳（502ケース）	8.4%。ただし世帯主の年齢が若くなるほど、連鎖は高くなる。1966年以降の生まれでは、29.4%。児童期に保護歴がある者の46.4%が、親や兄弟姉妹、親族も受給中。
道中（2009）	A市のケースワーク記録	約25%。母子世帯では約40%と高い。
駒村・道中・丸山（2011）	X市の被保護母子世帯のケースワーク記録（318ケース）	32%。

貧困の世代間連鎖を防ぐ

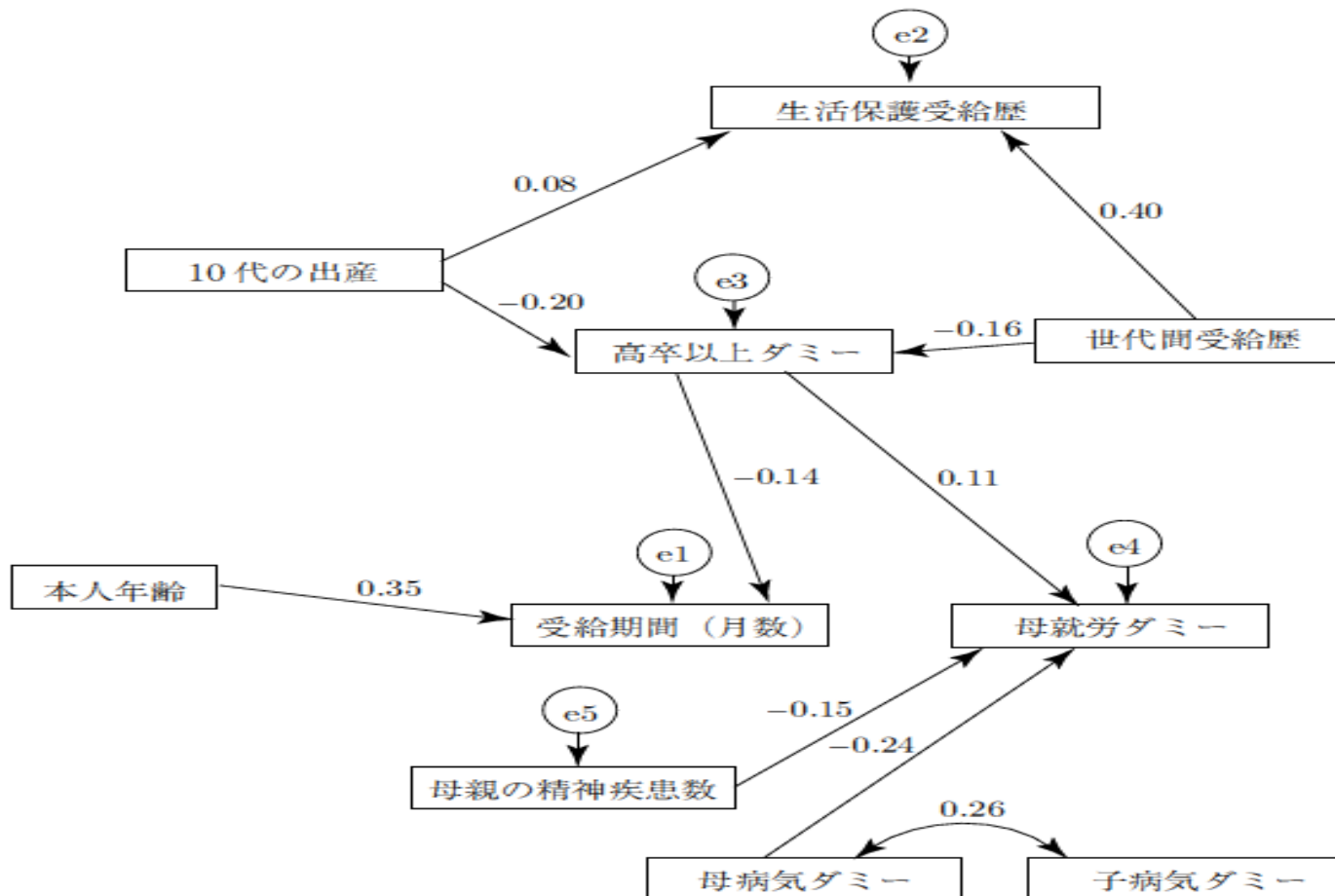
- 特に一人親世帯に集中する不利 -



被保護母子世帯におけるリスクの集中と世代連鎖

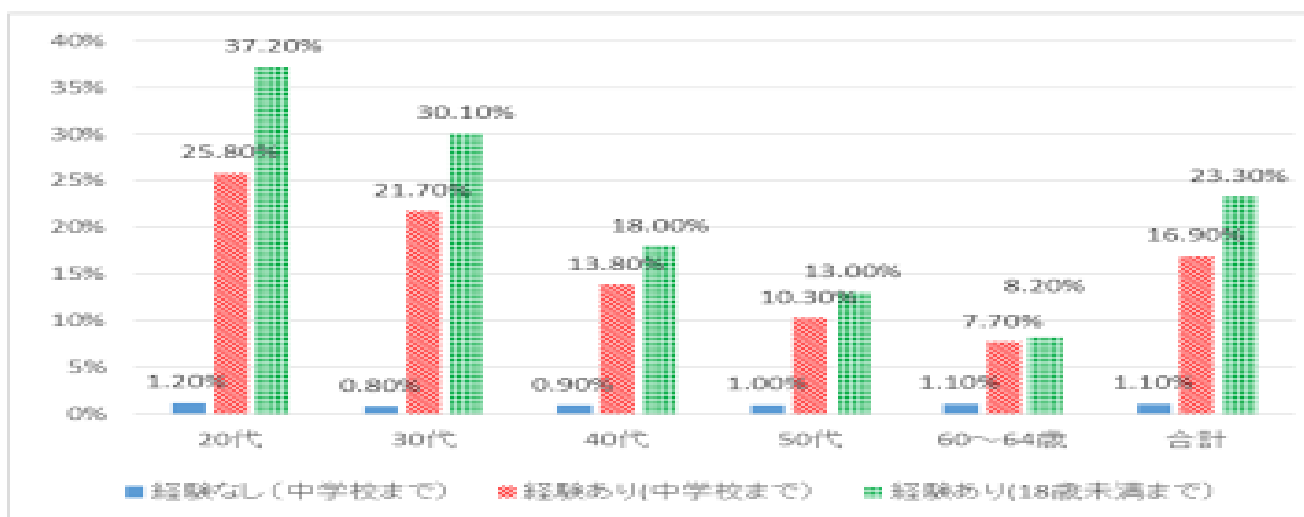
駒村康平・道中隆・丸山桂 (2011) 「被保護母子世帯における貧困の世代間連鎖と生活上の問題」『三田学会雑誌』103巻4号2011年1月.

図3 被保護母子世帯の抱えるハンディの関係



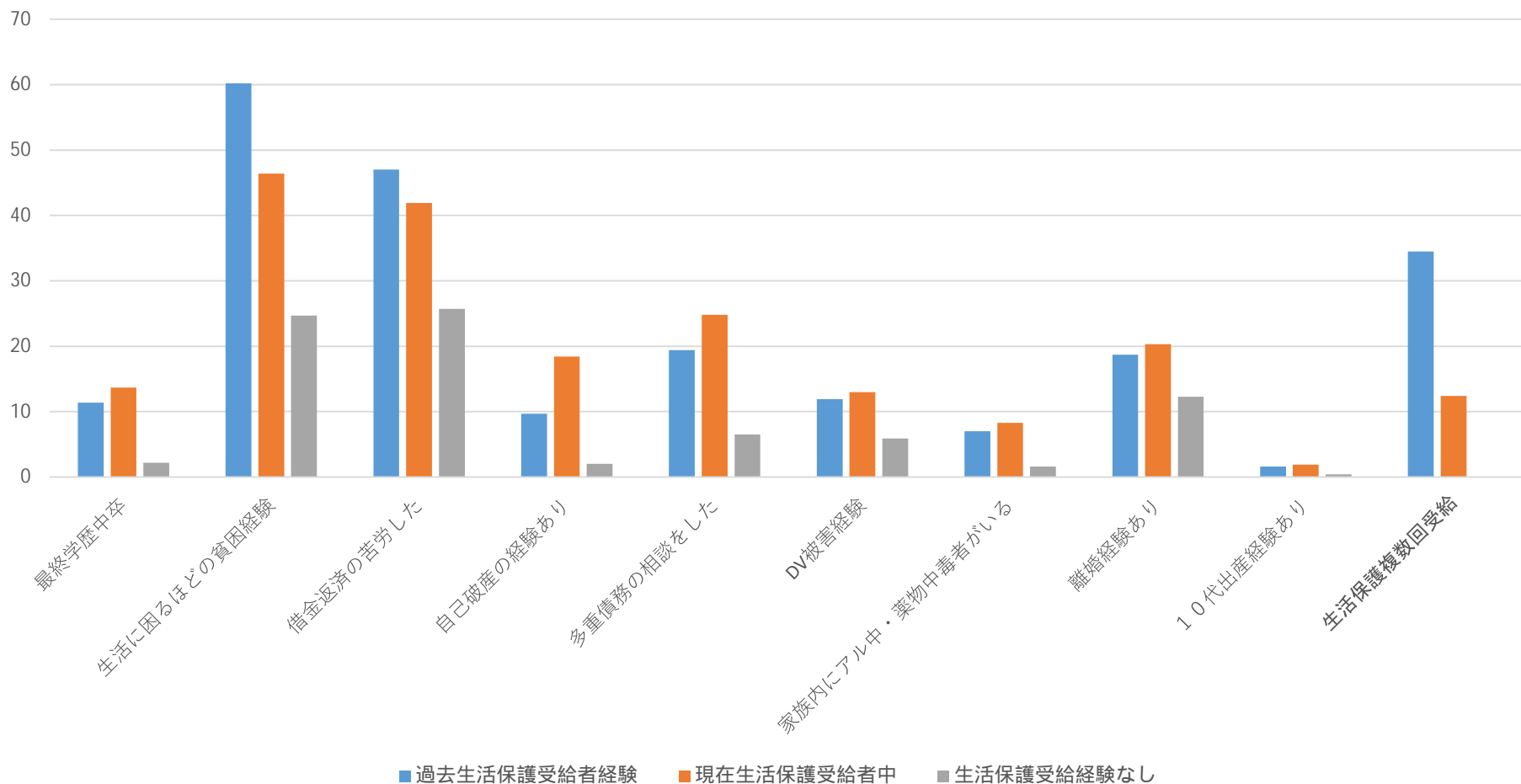
子ども時代に生活保護経験すると成人後の生活保護受給確率が上昇
→ 「生活保護を受けると不利」という意味ではなく、**成育環境の重要性**」 (出典：駒村・丸山(2018))

図表7 子ども時代の生活保護経験別の生活保護率



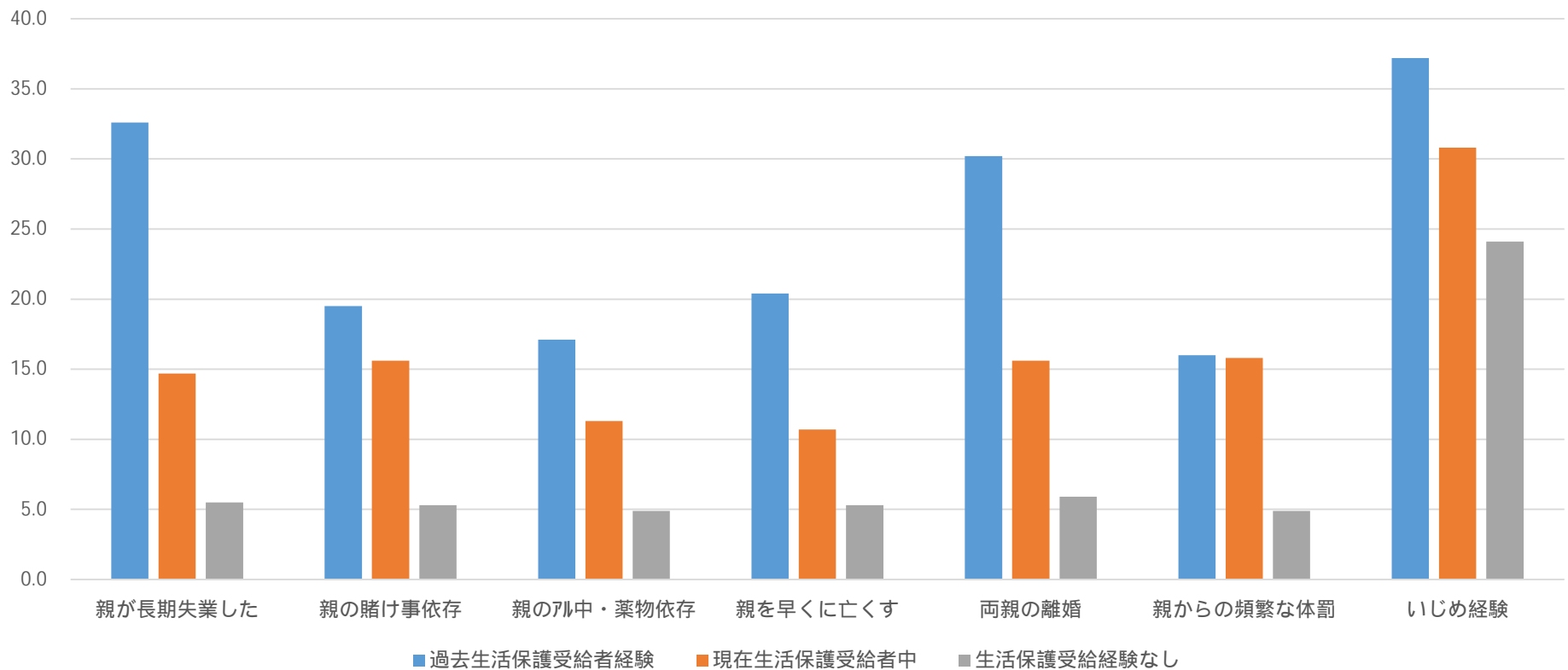
生活保護の受給経験と現在の状況

(自身の成人後の生活保護経験と現在の課題)



(出典：駒村・丸山(2018))

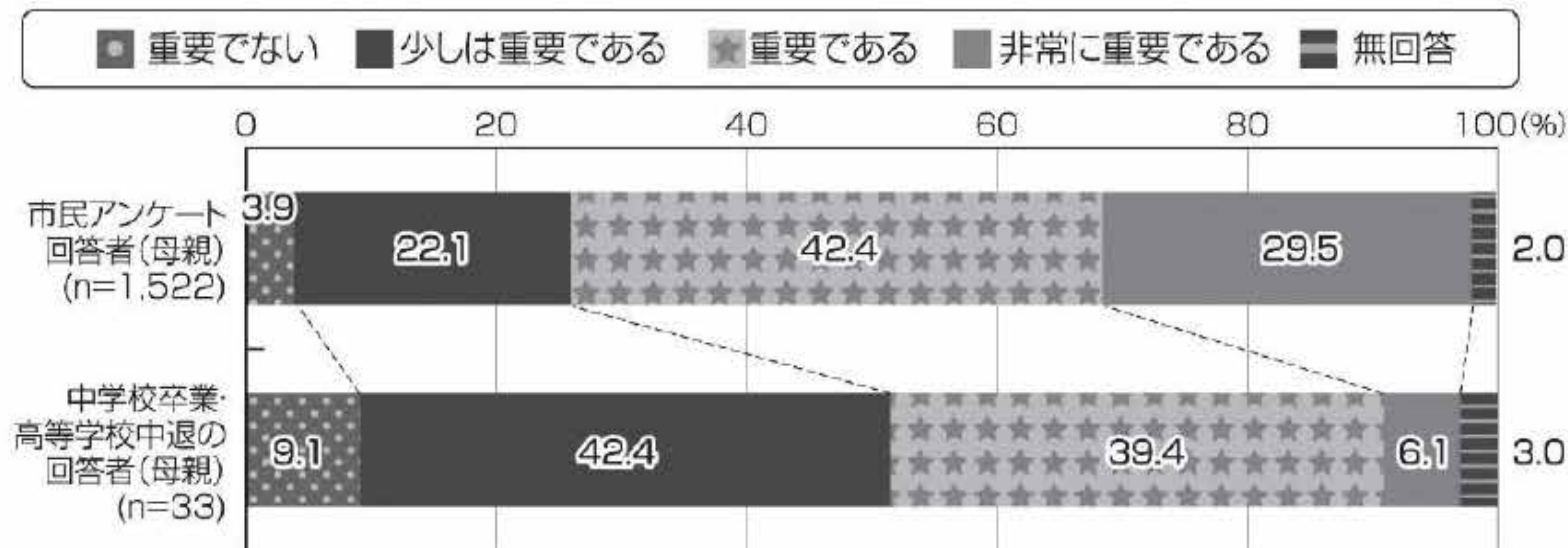
生活保護受給状況と子ども時代の経験 (自己の生活保護経験と「子ども時代の困難経験」) パットナムの毒性ストレス (逆境的児童体験尺度)



(出典 : 駒村・丸山 (2018))

親の教育観の課題

図表2-37 保護者の学歴と子どもの進学に対する意識との関係性



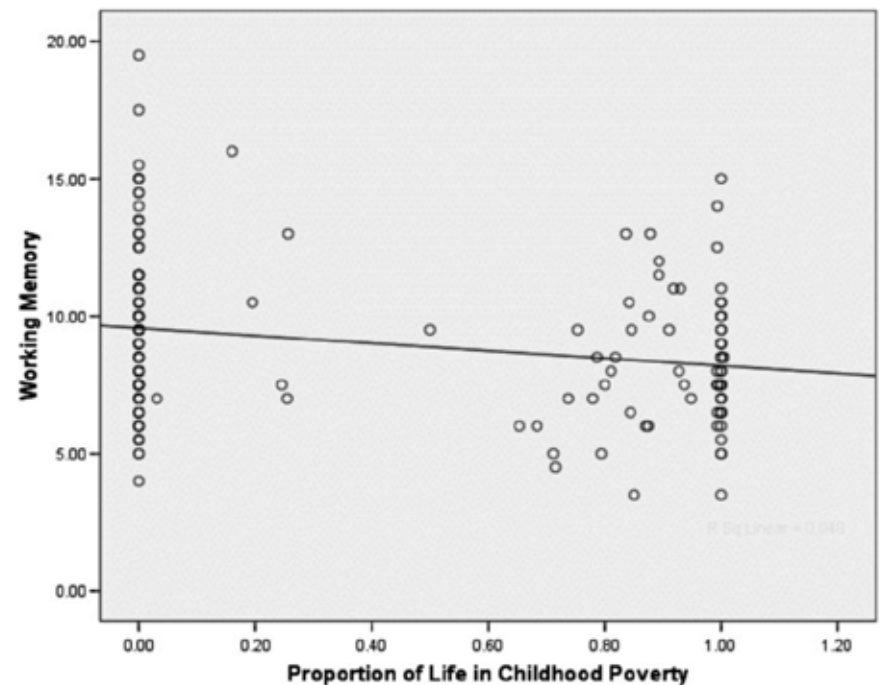
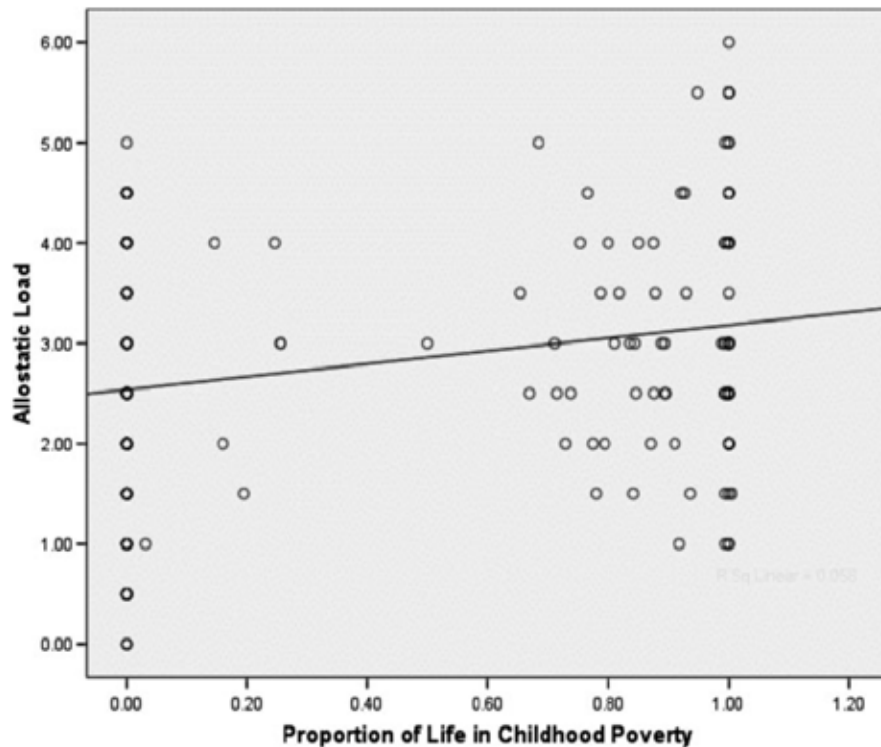
※回答者が「母親」の場合のみ集計。

横浜市子どもの貧困対策に関する計画（平成28年度～平成32年度）【平成28年3月策定】

出所：<http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/action/plan/kodomoplan2016-2021.html>

貧困期間・アロスタティック負荷（ストレス負荷）・ワーキングメモリ機能

"Childhood poverty, chronic stress, and adult working memory." By Gary W. Evans and Michelle A. Schamberg. Proceedings of the National Academy of Sciences, Vol. 106 No. 13, March 30, 2009.



3000万語の格差

1：親の接し方（話す量）と子どもの能力（言語取得・言語能力、IQ、9歳、10歳）の関係の相関関係

2：言葉の質と子どもの育ち（肯定的・応援VS否定的・命令）

→親の接し方が大きな影響を与える。

→所得階層間で言葉の量・質の違い

3歳の終わりまで	
専門職の子ども	4500万語の発語
生活保護世帯の子ども	1300万語の発語
差	3200万語

3歳時点での語彙	
専門職の子ども	1116語
生活保護世帯の子ども	525語
差	591語

出典：ダナ・サスキンド（2018）『3000万語の格差 - 赤ちゃんの脳をつくる、親と保護者の話しかけ』掛札逸美訳、高山静子解説、明石書店。

肯定的な話と否定的な話 言葉が子どもの成長に与える影響

1年間	肯定的・応援	否定・禁止
専門職の子ども	16.6万回	2.6万回
労働者層の子ども	6.2万回	3.6万回
生活保護世帯の子ども	2.6万回	5.7万回

4歳時点	肯定的・応援	否定・禁止
専門職の子ども	66.4万回	10.4万回
生活保護世帯の子ども	10.4万回	22.8万回

出典：ダナ・サスキンド（2018）『3000万語の格差 - 赤ちゃんの脳をつくる、親と保護者の話しかけ』掛札逸美訳、高山静子解説、明石書店。

児童養護施設等入所児童の虐待経験

表 1 2 被虐待経験の有無及び虐待の種類

	総 数	虐待経験 あ り	虐待経験の種類（複数回答）				虐待経験 な し	不 明
			身体的虐待	性的虐待	ネグレクト	心理的虐待		
里親委託児	4,534 100.0%	1,409 31.1%	416 29.5%	71 5.0%	965 68.5%	242 17.2%	2,798 61.7%	304 6.7%
養護施設児	29,979 100.0%	17,850 59.5%	7,498 42.0%	732 4.1%	11,367 63.7%	3,753 21.0%	10,610 35.4%	1,481 4.9%
情緒障害児	1,235 100.0%	879 71.2%	569 64.7%	70 8.0%	386 43.9%	275 31.3%	318 25.7%	38 3.1%
自立施設児	1,670 100.0%	977 58.5%	590 60.5%	45 4.6%	525 53.8%	287 29.4%	589 35.3%	104 6.2%
乳児院児	3,147 100.0%	1,117 35.5%	287 25.7%	1 0.1%	825 73.9%	94 8.4%	1,942 61.7%	85 2.7%
母子施設児	6,006 100.0%	3,009 50.1%	1,037 34.5%	102 3.4%	617 20.5%	2,346 78.0%	2,762 46.0%	235 3.9%
ファミリーホーム児	829 100.0%	459 55.4%	189 41.2%	45 9.8%	292 63.6%	134 29.2%	304 36.7%	66 8.0%
援助ホーム児	376 100.0%	247 65.7%	131 53.0%	38 15.4%	124 50.2%	96 38.9%	89 23.7%	38 10.1%

注) 総数には、不詳を含む。

出所：厚生労働省（2015）「平成25年児童養護施設入所児童等調査」

被虐待時期（性的虐待）による脳容積に関する影響

	海馬		脳梁		前頭葉前皮質	
		p値		p値		p値
脳容積	0.415	0.001	0.508	0.00	0.655	0.000
局所脳容積(被虐待期:3~5歳)	-0.566	0.000	-0.190	0.25	-0.020	0.900
局所脳容積(被虐待期:6~8歳)	0.313	0.170	0.251	0.33	0.102	0.620
局所脳容積(被虐待期:9~10歳)	0.036	0.830	-0.422	0.03	-0.130	0.450
局所脳容積(被虐待期:11~13歳)	-0.308	0.054	-0.121	0.50	0.094	0.550
局所脳容積(被虐待期:14~16歳)	-0.058	0.670	-0.041	0.80	-0.386	0.009
社会・経済的ステータス	-0.048	0.770	-0.232	0.20	0.148	0.280
うつ病歴	-0.254	0.180	-0.141	0.47	0.112	0.580
PTSD歴	0.011	0.930	0.031	0.85	-0.110	0.430
単語リスト再生課題	0.452	0.002				
全体的な相関	-0.837	0.00002	0.691	0.01	0.798	0.00050

出所：友田明美（2016）『新版 いやされない傷』診断と治療社（Andersen, Susan L., et al. “Preliminary evidence for sensitive periods in the effect of childhood sexual abuse on regional brain development.” *The Journal of neuropsychiatry and clinical neurosciences* 20.3 (2008): 292-301）

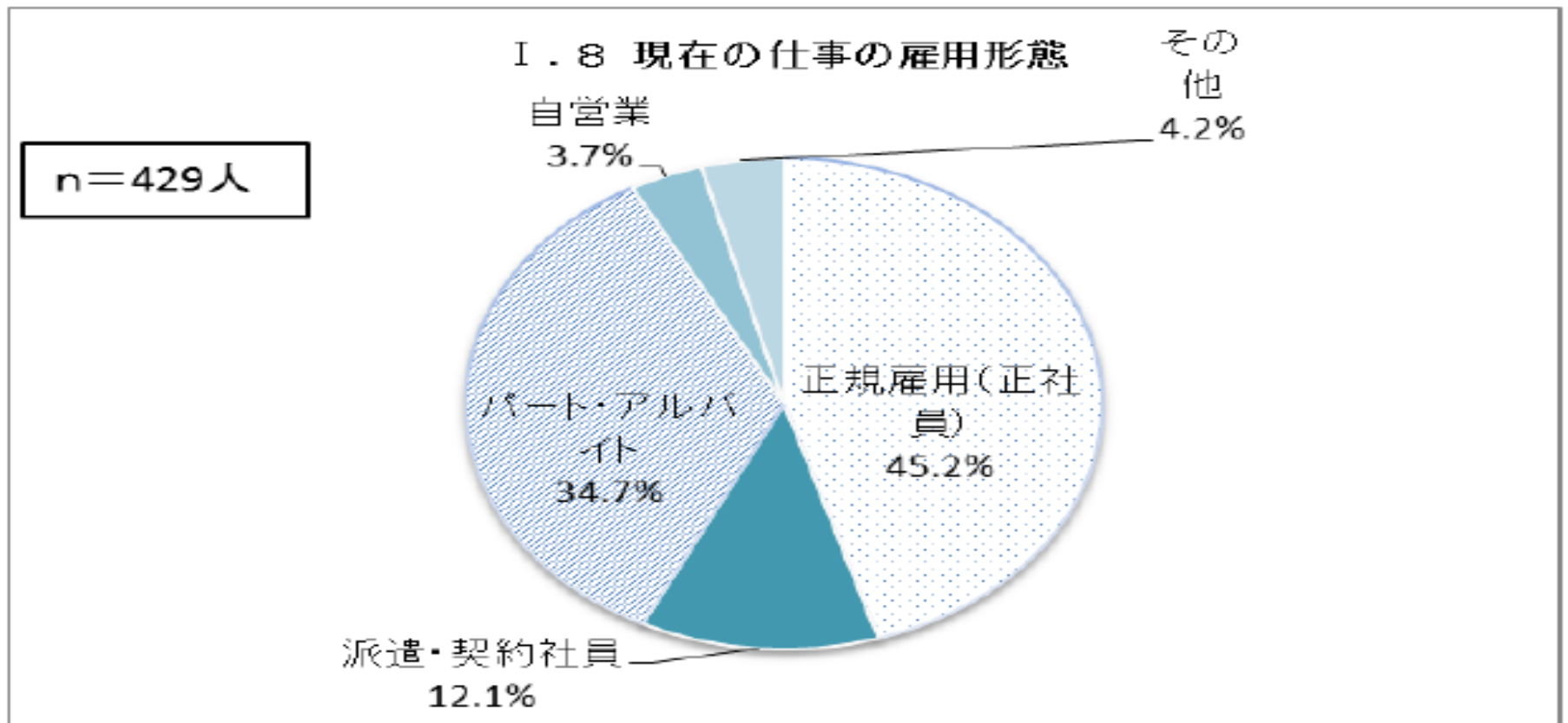
癒やされない傷（虐待経験）

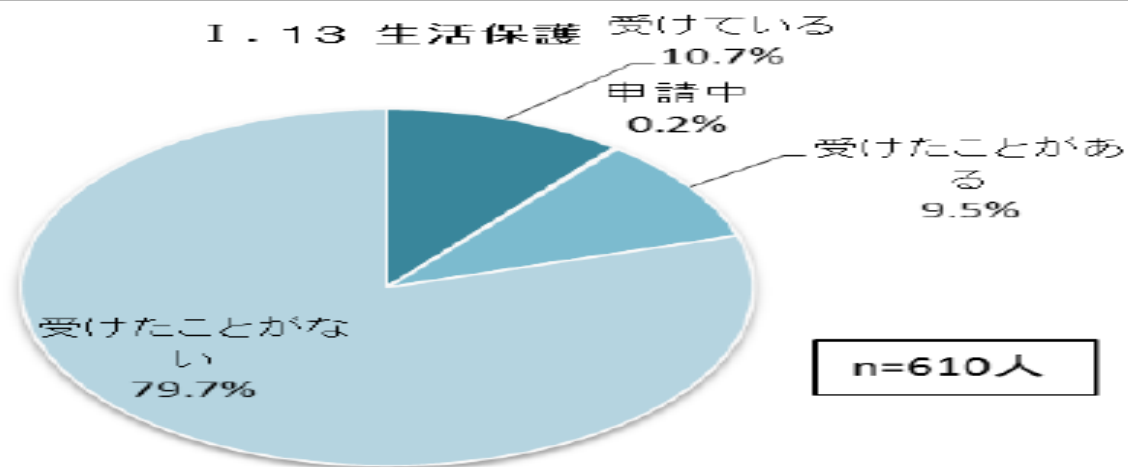
	報告者(発表年)	被験者数	被験者年齢(範)	検査方法	障害部位	結果
小児	Carrion (2010)	被虐待児:16人 (虐待に関連したPTSSに罹患) 正常対照:11人	11歳(10~17歳)	fMRI	海馬	機能低下
	Carrion (2009)	被虐待児:24人 (虐待に関連したPTSSに罹患) 正常対照:24人	11歳(7~14歳)	MRI	前頭前野 橋・小脳虫部	ボリューム増加 ボリューム減少
	DeBellis (2002)	被虐待児:43人 (虐待に関連したPTSSに罹患) 正常対照:61人	12 ± 2歳 (6.7 ~ 17歳)	MRI	左右の上側頭回 上側頭回灰白質 上側頭回白質	ボリューム増加 左右差(左 > ボリューム増加) 左右差(左 > ボリューム増加)
	DeBellis (2002)	被虐待児:28人(男 14/女 14) (虐待に関連したPTSSに罹患) 正常対照:66人	11 ± 3歳 (4.9 ~ 16.5歳)	MRI	前頭前野 (Brodmann9 野)、 右側頭葉 前頭葉前部皮質灰 脳全体と大脳 脳梁とその内部領 前頭葉部髄液	ボリューム減少 ボリューム減少 ボリューム減少 ボリューム増加
	Carrion (2001)	被虐待児:24人 (虐待に関連したPTSSに罹患) 正常対照:24人	11歳(7~14歳)	MRI	前頭葉 大脳全体	左右差の消失 ボリューム減少
	De Bellis (1999)	被虐待児:44人 (虐待に関連したPTSSに罹患) 正常対照:61人	(6.7 ~ 17歳)	MRI	大脳全体 脳梁の矢状断部領 脳梁の正中部と後	ボリューム減少 ボリューム減少 ボリューム減少
	Kitayama (2006)	虐待経験者:8人 (性的虐待に関連したPTSDに罹患) 健常被験者:13人(PTSDではない)		MRI	右前帯状回	ボリューム減少
成人	Bremner (2003)	虐待経験者:10人 (性的虐待に関連したPTSDに罹患) PTSDではない虐待経験者:11人	40 ± 6歳	PET	前頭前野皮質 (Brodmann9 野) 帯状回前部 (Brodmann32 野) 眼窩前頭皮質 (Brodmann25 野) 左の海馬 扁桃体	機能異常 機能異常 機能異常 ボリューム減少 機能異常

出所：友田明美（2016）『新版 いやされない傷』診断と治療社

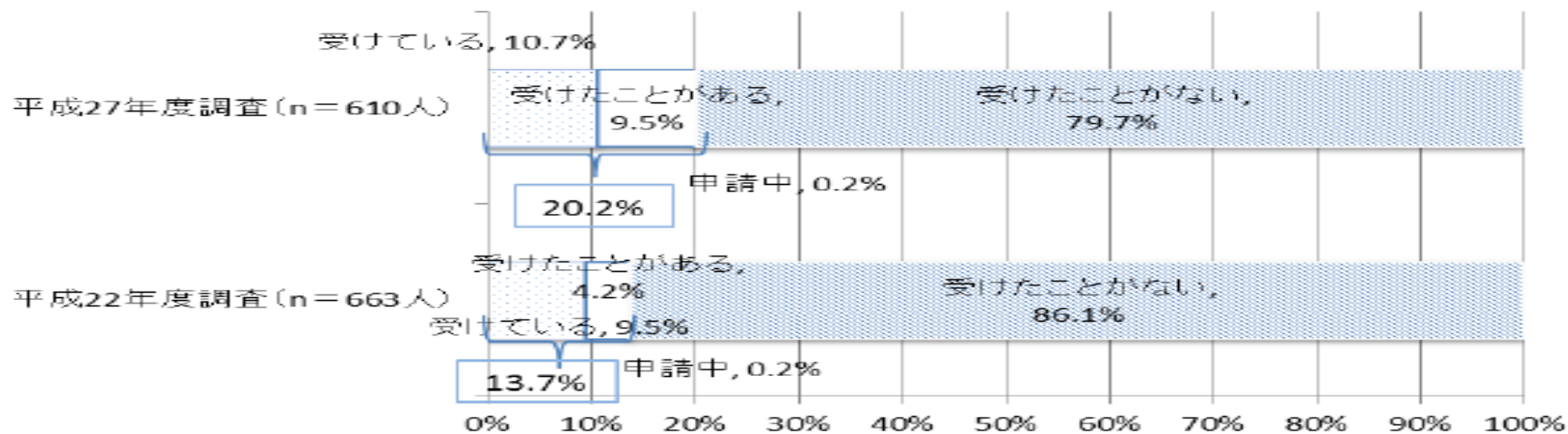
施設出身者の状況

(出典：平成29年東京都における児童養護施設等退所者の実態調査報告書)

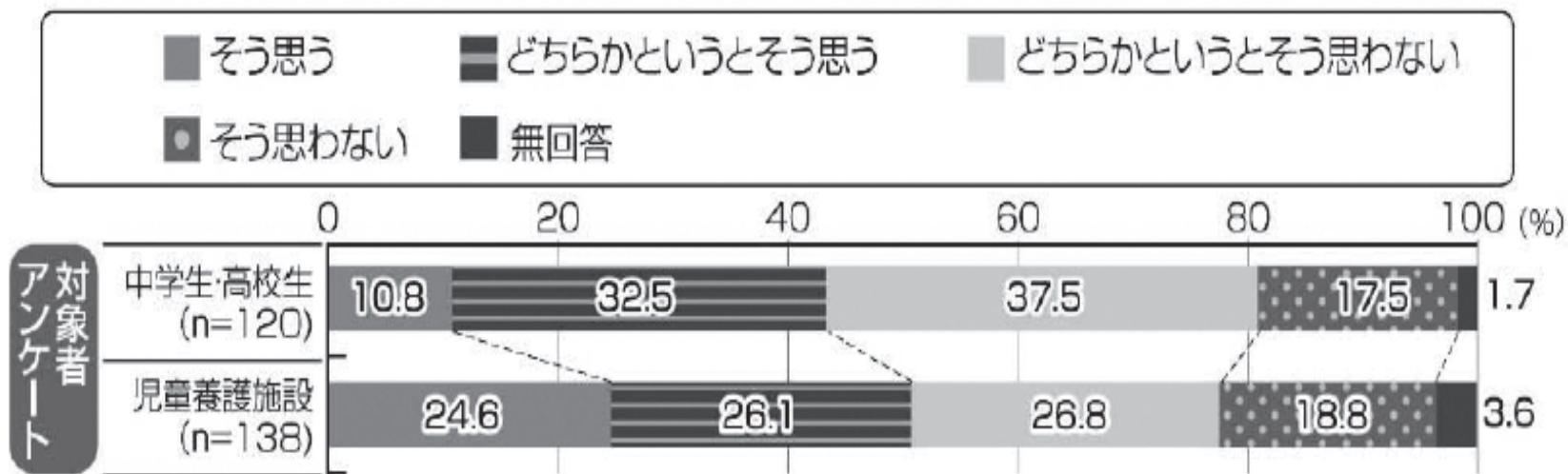




I. 13-1 生活保護【前回調査との比較】



図表2-25 人は信用できないと思う



横浜市子どもの貧困対策に関する計画（平成28年度～平成32年度）【平成28年3月策定】

出所： <http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/action/plan/kodomoplan2016-2021.html>